

平成二十七年 度

帝京大学中学校 第一回入学試験

# 国語問題

## 注 意

- 1 解答用紙に受験番号、氏名を忘れずに記入すること。
  - 2 問題の中で、字数が指定されている場合は、特に指示のない限り、句読点等を字数にふくめること。
  - 3 鉛筆は濃いものを使い、はつきりと書くこと。
  - 4 試験終了後、解答用紙のみ提出すること。
  - 5 試験問題は、からまで。
- 試験時間 50分、100点満点。

□ 中学一年生の心平は、目立ちたい一心で秋に行われる合唱コンクールの指揮者を引き受けたが、伴奏者の楓雅から放課後の練習につきあえないと言われ、かわりの伴奏者が見つからずに途方にくれている。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、文中に登場する人名はすべて心平と同じ一年A組の生徒のもので、ヒロと真琴はクラス委員です。

どうしよう。時間がない。つぎの練習日は刻々とせまってくるのに、伴奏者がいなければなにもはじまらない。せっかく里緒とアリスが歌う気まんまんんでいるのに。

翌朝、いつもならば蒼太たちと騒いでいるホームルーム前の時間に、心平は自分の席で頭を抱えていた。

結局、楓雅のスマホ案（注1）をうけいれるしかないのか。うけいれるならいまなのか。いや、でも、しかし……。

「あとう」

耳もどでおっさんくさい声が出たのは、そのときだった。

ぼんやり顔をあげた心平の前には、一年A組きつての老け役、ノムさんだ。

「心平くん。ちょっと、いいですか」

「はあ」

「陸くんが、心平くんには話があるそうで」

「へ」

よく見ると、ノムさんの横には陸がびたつとくつついている。まるで保護者によりそう小学生。この陸といい、イタルといい、ノムさんのそばにはいつも小柄な男子がまとわりついている。

「なに」

「あとう」

心平にうながされた陸は息をスーハーし、心の準備を整えてから、ようやくか細い声を出した。

「田町……田町さん、ピアノ弾ける」

「え」

「いまはわかんないけど、むかし、弾いてた。ぼく、聴いたことある」

「田町がピアノ？」

「上手だったよ」

「よっしゃー！」

心平はクラス中がふりかえるような大声をはりあげ、いきおいあまつて起立した。直後、

A かのよう、ふたたびよ

れつと椅子へくずれた。

そう。少し頭を働かせれば、そこにも大きな障害があるのがわかる。

「田町は、でも……学校、来いひんやる」

急に声のハリを失った心平に、

「うん。だから」

と、陸がこつくりうなずいた。

「だからっ」

①「だから」

②「だからっ」

「だから……」

「だからよけいに田町さんがいいって、陸くん、考えたみたいで」

言葉にできない陸を見かねたノムさんが代弁した。

「田町さんだって、もしかしたら学校に来るきっかけ、さがしてるかもしれないし。みんなのためにピアノを弾くって目的があったら、少しは学校に来やすくもなるかもしれないじゃない？ それに、田町さんがいれば、一年A組の二十四人、そろって合唱コンクールに出られるし」

「なるほど」

陸の提案を聞いたとたん、

B

③ ように、心平のなかでなにかが動いた。合唱コンクールというものが、それまで考えていたものとはまるでちがった威厳をおびて、なんだかひどく大切なもののように思えてきたのだ。

不登校中の田町がピアノを弾き、二十四人全員で合唱コンクールに出る。陸の考えたそれは、楓雅がスマホに吹きこんだ伴奏で練習するのは、まるで逆のことだった。自分がめだつたために指揮棒をふるのもちがう。

めだつ以上にやりがいのあるなにか。

未知なるそれをふりあおぐ思いで、心平は「よっしゃー！」とこぶしをかたくした。

「なんとしても、田町にピアノを弾かせたる。放課後、早速、田町をくどきに行くで！」

(中略)

「果歩ちゃん。学校のおともだちよ」

その日も、夕方、部屋でマンガを描いていたところをおばあちゃんに呼ばれ、田町はあわてて原稿を机の引きだしに隠した。時計を見ると、四時半。部活帰りのふたりにしては早いと思いつつも、ぼさぼさの髪を整え、いつもの面会場所である居間の戸を開ける。

そこに、いつもどちがう三人の顔を見たときは、もうちよつと悲鳴をあげそうになった。

C

のかと、目をうたぐつたほどだ。

居間の円卓をかこんでいたのは、おなじクラスの陸と心平、そしてまだ名前もおぼえていないもうひとりの男子だったのだ。

なんでりつくくんがここに？

なんでこのふたりと？

「あ、う、おじゃまします」

「おっす」

「あ……ひざしぶり」

雨にぬれた学ラン(注2)の肩を所在なげにゆすっている三人の前で、田町はパニックを起こしながらも反射的にシャツのそでを引っぱり、左手首にしていた虫よけリングを隠した。

もうとうににおいも消えている薄緑のリング。

④ セミのぬけがらをさがしたあの日、陸に返しそびれたそれをいまでもときどき身につけていること。そうしていると落ちつくこと。自分だけの秘密であるそれを、陸に知られたくなかったのだ。

あの日。近所の公園で陸と出くわしたあの瞬間を、田町はあの夏のひざしもろとも、くつきりと思いだす。

ベンチの上からふりむいたそこに陸が立っているのを見たとき、見つかった、と思った。長い長いかくれんぼのすえに、ようやくだれかに見つけてもらったような。

陸は幼稚園に入る前からの幼ともだちだ。話をするのは数年ぶりだったのに、おっとりとして気の優しい「りつくくん」の面影が残ってい

たせい、人みしりの田町も陸とはかまえずに話をする事ができた。自然な自分でいられた。なにかといえは虫の話をするには少々辟易(注3)したものの、陸が自分の不登校を気にしてくれているのを知ったときには、のどの奥がじんとして泣きそうになった。

なのに、自分のなざけない現状をうまく伝えられず、はがゆい思いでもじもじしているうちに、こまった事態におちいった。急に、猛烈に、おしっこがしたくなったのだ。

トイレに行つてくる。そのひとことがはずかしくて言えず、がまんして、がまんして、もう限界——と、そのとき、一匹の蝶を追つて陸がベンチをはなれた。

いまだ！ 陸が背なかをむけているすきに、田町は一目散に公衆トイレをめざしたのだった。

せつかく楽しかった時間を、あんなふうに残らせてしまったことを、いまでもくやんでいる。

陸だけの秘密の丘へ連れていってくれたのに。お守りみたいな虫よけリングを貸してくれたのに。ひさしぶりにだれかと笑いあえたのに。

なのに、バイバイもありがどうも言わずに帰つてしまうなんて、最低だ。陸はあきれいているだろう。そう思うと、ますます学校へも行きづらくなった。

あれ以来、ずっと心にひつかかっていた陸が、なぜかいま、自分の家にいる。クラス一ひょうきんものの心平と、お父さんみたいにおとなびた男子といっしょに。

なんでだろう？

なにがどうなれば、こういうことになるんだろう？

学ランが三つもあるせい、古びた畳を敷いた和室は異様に黒っぽく、威圧的に見える。

D

みたいで、田町はどこへ目

をやればいいのかもわからない。

「ボクたち、わざわざ来てくれて、どうもありがとうねえ。とりあえずこんなものしかないけど、いまね、わたし、ジュースでも買ってくるから。すぐ買ってくるから、待つてね」

お茶を運んできたおばちゃんも気が動転している様子で、⑤ジュースがなければこの男の子たちは幻と化してしまう、とばかりの剣幕で家を飛びだしていった。一度は傘を、一度はさいふをとり引きかえてきたその足音が去ると、部屋のなかはますますしんとした。

残された田町は心細くてたまらず、なにかに触れたくて湯飲みへ手をのばした。熱い。

と思った矢先、円卓ごしに「アチツ」と心平の声がした。

「アチチチチチーッ！」

見ると、舌をのぼして犬のようにハアハアし、おおげさにもがき苦しむ演技をしている。

この男の子はあいかわらずだ。まじまじながめていた田町と目が合うと、心平は舌をひっこめて「でへっ」と笑った。

「あかさ」

笑いながら、でも、目だけは笑わずに田町を見すえている。

「ひと月後に、学校の合唱コンクールがあつてな」

合唱コンクール。予想外の出だしにきよとんとする田町に、続けざま、心平は驚愕のひとことを突きつけた。

「田町、ピアノの伴奏してくれへん？」

意味がわからず田町は瞳をしばたいた。E かのようには、返事をするどころか息さえも止まった。

「伴奏？」

「ピアノ、弾けるんやろ」

覆いかぶせるように心平が言う。

「うちのクラスでピアノが弾けるの、田町と楓雅しかおらんんや。楓雅はテクはあるかもしらんけど、ハートがあかんから、クビにしまった。なにがスマホか。ちゆうことで、ここはひとつ、田町にやってもらうしかあらへんねん。な、たのむ。みんなのために伴奏、引きうけてくれんか」

こうなると田町はもうダメだ。テンポの速さについていけない。ハート？ スマホ？

「待つて」

頭の整理がつかないまま、ようやくひと声、しぼりだした。

「むり」

「なんで。ピアノ、弾けるんやろ」

「それは……」

「習つとるんちゃうの」

「小六までは習つてたけど」

「いつから?」

「五歳」

「ベテランやん!」

「でも、伴奏なんて、むり」

「そう言わんで、たのむ。田町しかおらんのか」

心平が身をのりだし、田卓のふちに両手をつけて、がばっと頭をさげた。

「このとおりや!」

田町はもうびつくりすぎて声もなかった。

心平はクラスの人気者だ。いつも教室のまんなかにいる。一番明るいところにいる。その心平が、一番暗いところにいる自分に頭をさげている。

「一年A組には田町が必要やねん!」

そのひとことに田町はハツとした。

「必要やねん!」

家にもなるようになってから、真琴とヒロが何度も足を運んでくれた。時にはクラスメイトたちの手紙も届けてくれた。みんなが心配してくれた。はげましてくれた。優しい言葉をかけてくれた。でも、必要だと言われたのは、はじめてだった。

こんな自分でもクラスの役に立つ。その事実を、田町は時間をかけて頭にしみこませようとした。⑥にわかには信じられないから、ゆっくり信じようとした。

(森 絵都『クラスメイツ』より)

(注1) 楓雅のスマホ案…心平は、バイオリンの練習でいそがしい楓雅から、自分のピアノ伴奏をスマホに録音し、それで練習すればいい、という提案を受けていた。

(注2) 学ラン………学生服のこと。

(注3) 辟易………対応のしようがなくて困ること。

問一 

A	E
---	---

 にあてはまる語句として適切なものを次の中から一つずつ選び、ア～オの記号で答えなさい。

- ア 異次元への扉でも開けてしまった    イ 時間ごと凍結してしまった    ウ 見えない障害物に脳天を打ちつけた  
エ 自分の家が自分の家でなくなった    オ ごうつと風が吹く

問二 ——線①・②の「だから」に込められたそれぞれの人物の気持ちの説明として適切なものを次の中から一つずつ選び、ア～カの記号で答えなさい。

- ア 心平はノムさんが横から口出しをしてくるので、いらだっている。  
イ 心平は陸からどんな話が出てくるのかわからず、先をうながしている。  
ウ ノムさんは陸の引つ込み思案な性格を知って、手助けしようと思っている。  
エ ノムさんはあまり仲のよくない心平と陸の仲立ちをしようと、はらはらしている。  
オ 陸は田町を伴奏者にして学校に来させるために、なんとか心平を説得しようと意気込んでいる。  
カ 陸は田町に合唱の伴奏をさせたいと考えたが、心平にどう切り出してよいかわからずためらっている。

問三 ——線③「合唱コンクールというものが、それまで考えていたものとはまるでちがった威厳をおびて、なんだかひどく大切なもののように思えてきた」とありますが、この時、心平にとって合唱コンクールはどのようなものになったのですか。六十字以内で説明しなさい。

問四 ——線④「陸に返しそびれたそれをいまでもときどき身につけていること。そうしていると落ちつくこと」とありますが、田町がこれを身につけていると落ちつくのはなぜですか。その理由を五十字以内で説明しなさい。

問五 — 線⑤「ジュースがなければこの男の子たちは幻と化してしまふ」とありますが、この表現から読み取れるおばあちゃんの気持ちの説明として適切なものを次の中から一つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

- ア 田町は今までクラスの男の子たちと接する機会がなかったので、田町を気に入って、味方になってほしいと願っている。
- イ クラス委員以外の同級生が不登校の田町を訪ねてきたことがなかったため、少しでも長く家にいてもらいたいと思っている。
- ウ 田町の不登校の原因になったクラスの子供たちがいきなり押しつけてきたので、非難することもできず途方にくれている。
- エ クラス委員の二人以外の子供の顔を知らなかったため、どうあつかつていいかわからず、とまどっている。

問六 — 線⑥「にわかには信じられないから、ゆっくり信じようとした」とありますが、この時、田町はどういう気持ちでしたか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

- ア 男子たちがいきなり伴奏してくれと頼みに来た身勝手さに腹を立てながらも、いきなり断るのも悪いと考えている。
- イ クラスのみんなが自分を必要としてくれていることを知り、協力したいと思うが、伴奏が上手にできるかどうか不安に感じている。
- ウ 伴奏を引き受けたいが、他のクラスメイトたちが自分を受け入れてくれるかどうかわからず、返事をためらっている。
- エ いつも目立たないところにいた自分がクラスの役に立つと言われ、予想もしなかった言葉に驚きながらもうれしく思っている。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「寝た子を起こすな」ということばがあります。大人だけが知っていればよいことを、子供に無理に知らせることはないという意味です。遊具のある広場で小さな子供が無邪気に遊んでいることについて、遊具は安全だろうか、ブランコの鎖はこわれていないだろうか、砂場の砂に悪い病原菌はいないだろうかといったことは大人が考えればよいことで、子供に伝える必要はありません。そういうことはたくさんあります。これから私が書くこととして、あるいは、そういうことのひとつかもしれないのですが、私は **A** 書くことにしました。それは **②** 知らないで起こす過ちをできるだけなくしたいという考えからです。

ギスギスした現代社会では、人と人のかかわりも薄くなり、**B** 都市ではたくさんの方がいてもお互いに知人というわけではありません。電車に乗ってもみなだまって本を読んだり、スマホを使ったり、居眠りをしたりしているだけです。職場で顔を合わせる人も自宅はいろいろな場所にありますから、小さな町で暮らしているときに、街角などで顔を合わせて会釈をするということもほとんどありません。つまり人と人とのつながりが稀薄になっているわけです。そうしたこともあって、ペットと向き合うとほっとしていやされるといふ人が増えています。

その結果、ペット産業は発展するようになりました。すでに書いたように、昭和三〇年代まではイヌやネコには残飯を与えていたのに、今や栄養バランスを考えた高価なペットフードや缶詰などもあり、「衣類」や墓地などにも大金が払われるようになりました。そしてペット産業は大産業になりました。

私たちはペットを飼うと家族の一員だという実感をもちますが、産業として売買するという点でペットは「商品」という側面を持っています。商品である以上、売る側は買い手の好みを調べます。むかし、アニメ「フランダースの犬」が放映された頃、そこに登場するパトラッシュという名のイヌが人気になり、ペット産業は「ヒット商品」になると目をつけて、似た品種を輸入しました。買う側の心理としても、「テレビで見たかわいいイヌが欲しい」というものですから、それは通信販売で電化製品を買う感覚とそんなに違いありません。当然市場調査が行われ、流行も作られます。

そのことは **③** どういうことを生み出すか。商品としてのペットはふつうの商品とは違う点があります。それは「成長する」という点です。ぬいぐるみの子犬や子猫はかわいいままですが、本物の子犬や子猫は成長します。それも人よりずっと速く成長します。多くの人がとくにかわいいと感じるのは、イヌなら生まれて六週間までだそうです。現に三〜四週齢の子犬がよく売れ、これを過ぎると売れ行きが急に落ちるそうです。ですから売るためには買う人がかわいいと感じるうちがいいわけです。

C 生後八週までに親犬から無理に離すと、子犬は健全な精神発達ができなくなり、飼い主を咬んだり、いうことをきかなくなったりする「問題犬」になることがわかっています。イヌは群れを作って暮らす動物なので、無理に隔離されるとコミュニケーションをとることがむずかしくなるのです。ですから欧米では子犬が八週間になるまでは売ってはいけないと法律で決められています。最近日本でも法律が改められて生後七週までは売ってはいけないことになりましたが、法律を変えるまでは業者から強い抵抗があつたそうです。そういうわけですから、売れ頃を過ぎた子犬は業者からすれば邪魔者になってしまいます。私が「寝た子を起こす」と言ったのはこのこととです。つらいことですが、売れ残ったイヌは処分される、D 殺されてしまうのです。

産業である以上、利益を追求するのは当然のことかもしれません。そのためにはいかに買い手の求めるものを生み出し、高く買ってもらうかが勝負になるわけですから、買い手が欲しいと思うかわいい子犬を生み出して、よいタイミングで売り、売れ残ったら処分するという、ほかの商品と同じことをするわけです。産業の原理を考えればしかたのないことなのかもしれませんが、子犬の一生を考えると、命をほかの商品と同じように扱つてもよいのかどうか、私には判断がつきません。それでも次のことは言えると思います。

一人一人がペットを飼うということは楽しいことで、よい飼い主に出会ったペットは幸せな一生を送るでしょうが、産業としてのペットの売買の裏には、ペットが処分されるという現実もある。そういうことを知ることは、知らないよりはいいことだということです。

処分されるペットはこうした業者からのものだけではありません。むしろこれは特殊な事例と言えるもので、実際にはふつうの市民が、飼っていたイヌやネコを手放すことで処分されることのほうがはるかに多いのです。飼い主のことを聞かないからとか、年をとって糞や尿をたれ流すからだとか、引越先ではペット禁止だからとか、さまざまな理由でイヌやネコを手放し、自治体の保護施設に連れてくる人がたくさんいるのです。

「保護施設」という名前からすると預かつて飼つてあげるような感じがしますが、市町村の組織でたいへんな数のイヌやネコを飼うことなどとてもできません。しばらく預けられたイヌやネコはほとんどの場合、二酸化炭素のガス室に入れられて安楽死させられます。私はそのようなすを描いた本を読みましたが、息苦しくなってページを閉じたい気持ちになりました。しかし、このことは現実にあるということを知っておかなければなりません。日本で毎年二十数万匹ものイヌやネコがこうして処分されているのです。

(高槻成紀『動物を守りたい君へ』より)

問一 線①「そういうこと」が指している部分を文中から十五字で抜き出して答えなさい。

問二 線②「知らないで起こす過ち」とありますが、私たちは何を知らずに、どのような「過ち」を起こすのですか。本文全体をよく読んで八十文字以内で答えなさい。

問三 A、B にあてはまる語句として適切なものを次の中から一つずつ選び、ア、オの記号で答えなさい。

ア ぜび イ とくに ウ あえて エ とても オ まったく

問四 線③「どういうことを生み出すか」とありますが、何を生み出すのですか。生み出すものを二つ、それぞれ二十文字以内にまとめなさい。

問五 C、D にあてはまる語句として適切なものを次の中から一つずつ選び、ア、オの記号で答えなさい。

ア ところが イ さて ウ また エ つまり オ そして

問六 本文の内容に合っているものを次の中から一つ選び、ア、エの記号で答えなさい。

- ア ペットの置かれた悲しい状況を改善するためには愛情に満ちた飼い主の存在が必要だと考えている。  
イ ペットの運命は産業における商品の運命と同じなので、売れ残りがでないような様々な工夫が必要だと考えている。  
ウ ペットが生き物であるということを無視して商品化していることに怒りを感じ、国は強い指導をすべきだと考えている。  
エ ペットに関するさまざまな問題を知ること、飼い主に責任感が芽生えると考えている。

目 次の1〜5について、——線部が同じ使い方になっているものを後から一つずつ選び、ア〜ウの記号で答えなさい。

1 天気予報によると、明日は晴れるそうだ。

ア この雲行きでは、もうすぐ雨が降りそうだ。

イ 彼は毎朝五時半に起きるそうだ。

ウ 彼が持っている荷物は、とても重そうだ。

2 目撃者によると、現場にいたのは若い男らしい。

ア 今回の彼の業績は、とても素晴らしい。

イ タクシーは後十分ほどで迎えに来るらしい。

ウ 彼女は優しい性格で、とても女らしい。

3 この程度の仕事なら、私一人でも片付けられる。

ア 賞味期限まで余裕があるので、まだ食べられる。

イ 明日は校長先生が授業を見学に来られる。

ウ 無理にやろうとしたが、周りの人に止められる。

4 念入りに掃除をしたので、パイプに水がつかまらない。

ア この仕事さえやり終えれば、思い残すことは何もない。

イ 温泉に行ったが、お湯が熱すぎて入れない。

ウ 友達とけんかをするなんて、つまらないことだ。

5 彼女に思いを寄せながら、結局伝えることができなかつた。

ア 今度の作品は、我ながらいい出来だと思ふ。

イ せっかくな宿題をやりながら、家に忘れてきてしまった。

ウ テレビを見ながら食事するのは、行儀が悪い。

四

次のそれぞれの——線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- 1 ヨウシだけで人を判断してはいけない。
- 2 ここでは羊をホウボクしている。
- 3 新たなナイカクが組織された。
- 4 事故が起きないようにしつかりとテンケンする。
- 5 品物をきれいにホウソウする。
- 6 絹はカイコの糸から作られる。
- 7 コメダワラをかつぐ。
- 8 神社にサンパイする。
- 9 だいぶちヨキンが増えてきた。
- 10 ザンシヨが長く続いている。

